



あれから10年、これからは

10年という月日は長いのだろうか。2011年3月11日、私は横浜市で友人の仕事の手伝いをしており、突然の揺れに驚いて外に飛び出し、足元がぐらつき電線が大きく揺れるのを眺めながら、呆然としていた。つながらない電話に不安はつのも、帰宅できないとわかると友人が泊めてくれると言ってくれた。息子から家族が無事というメールが入ったときは心底ほっとし、友人宅で温かい布団で休めることをとてもありがたく思った。余震で揺れるたびに心がざわつき、夜中に福島に住む母の安否もわかったのだが、眠れない一夜であった。翌朝はさいたま市の自宅に帰ることができたが、福島原発事故で新たな不安がわきあがることとなった。

私は、2011年「9.19 さようなら原発5万人集会」で福島からのアピールとして行われた武藤類子さんのスピーチを聞いたときは涙がこぼれた。「みなさん、福島はとても美しいところです。」「私たちはいま、静かに怒りを燃やす東北の鬼です。」「私たちは、なにげなく差し込むコンセントの向こう側の世界を想像しなければなりません。」「『福島からあなたへ』武藤類子著 大月書店 2011年)私は、何十年も故郷福島を離れて暮らしている。東日本大震災で故郷に住む友人、知人や見慣れた風景がとてもとても懐かしく大切なものであることを思い出した。

10年はやはり長い時間だと思う。私は、故郷福島を思いながら気持ちを寄り添うしかできずに10年が過ぎた。武藤類子さんは、10年目を迎える今年の2月、『10年後の福島からあなたへ』(大月書店)を出版した。私は、この10年間に大きく変わった事と、変わらなかった事をしみじみと思いながら読み終えた。今でも絶望的な現実にいる人々の事を、尊厳を取り戻すための努力を続ける人々の事を、想像する心は失いたくない。



その後の10年間も日本各地で様々な災害があつて、私たちは今までの生活の見直しに迫られた。追い打ちをかけているのが、世界中にまん延しているCOVID-19。収束後の生活はどのようになるのだろうか。私は、災害やその後の生活を描いた文学や記録を探して読んでいる。その中で、発刊時にも読み、10年過ぎて改めて読んだ『神様2011』(川上弘美 講談社 2011年)が心に強く残っている。日常は続くけれども、今まで当たり前になできた事ができなくなり、変化してしまう可能性があるのだ。私にはその中で生きていく覚悟はあるのか。年齢を重ねて、身体の不調を抱えながら、過去ばかりを思ってしまう自分を戒めている。
(礒部)

『ノマド 漂流する高齢労働者たち』

ジェシカ・ブルーダー著

鈴木素子訳 春秋社

(2017年アメリカ)

翻訳書は2018年)



「ノマド」とは「放浪の民」という意味。現代の米国で、キャンピングカーで生活し、働き口を求めて移動を続ける人たちを指す。著者は当事者へのインタビューを重ねて、リーマンショックなどを経て大勢の人たちが中流から貧困層に転落し、住宅費を節約するために車上生活を始める状況を描き出した。

ノマドの多くは60代以上。アマゾンの仕分け作業、砂糖大根の収穫、キャンプ場の清掃・管理などの仕事につくため季節ごとに広大な米国西部の砂漠を駆け巡る。驚くのは、アマゾンのような巨大企業が彼らを使い勝手のよい労働力群(季節労働などで労働組合を結成する暇もない)として企業戦略に組み込んでいることだ。繁忙期限定で停泊のための駐車場さえ用意しておけば求人への応募が殺到し、さらに「高齢者を雇用している」として政府の補助金すらもらえる。

劣悪な労働条件でこき使われる高齢のノマドたち。肉体労働ができなくなったら、車の運転ができなくなったら、病気になったら、彼らはどうするのか。しかし、著者はノマドの生き方に希望を見ようとしている。格差が広がり荒廃していく米国社会で、彼らは生き延びるために家を捨て、路上に出ることを自分で考えて選び取ったのだ。

安穏とした「老後」が消えうせた一方で、お金をかけずに助け合って暮らし、大自然の中を疾駆し、時に仲間とともに焚火を囲むノマドたちは、どこかすがすがしい。この本を原作として、実在のノマド客演で今年のアカデミー賞3部門を受賞した映画「ノマドランド」もおすすめ。

(前田)

池見葉満代 聞き書き『台所の心理学』

秋月枝利子著

海鳥社

(2020年)



この本は、大先輩で自彊術を実践している池見葉満代さんの幼少期から現在に至るまでの文章で、夫を支える人からパートナーになった自己分析レポートだ。「すべての病はストレスが関わっている」心身医学は医学の基本ととらえて日本最初の心療内科を創り、世界の心身医学のリーダーとして研究に生涯を通して邁進した夫の池見酉次郎博士。その夫や姑にただただ仕えた妻ではなく、いつしか夫と繋がることになった話である。

著者の秋月枝利子さんは、「台所の心理学とは何だろう、現実的な知恵が詰まっていそう」と直感したそう。2016年の初夏からお話を録音し、原稿に書き直し、それを葉満代さんに確認をいただく繰り返しで、幼少期から現代までの生活や出来事をすらすらと出てくる記憶力の正確さに驚いた。いつしか3年が過ぎ、大正、昭和、平成、令和と目まぐるしく変わる時代を生きた人生の記録はボイスレコーダーに50時間を超した。酉次郎先生が妻、葉満代さんについて書かれた文章に「互いに影響しあって、人間性への気づきが深まるにつれて、私ども二人の間柄は、単なる夫婦というより絶対の孤独に生きるものどうし、求道者どうしの出会いといったものに近づいてきました」とある。葉満代さんは、現在97歳、今でも楽しみに自彊術体操を続けておられる。

その自彊術は、1916年(大正5年)に、中井房五郎氏によって考案された日本で最初の健康体操で、その後十文字大元氏が、「自彊術」と名付けた。現在は、ラジオ体操が主流になっているが、自彊術体操はそれ以前よりの歴史のある体操で、元気の出る体操である。私も葉満代さんの貴重な生き方に学び、仲間と共に楽しく自彊術体操を続けたい。(林)

『ビーガンという生き方』

マーク・ホーソーン著

井上太一訳

緑風出版

(2019 年)



最近「ビーガン」という言葉が聞かれるようになってきた。完全菜食主義という訳があてられることが多いが、この本では「脱搾取派」と訳している。ビーガニズムとは「脱搾取」のことだ。

人間は動物を犠牲にしなくても生きていける。それだけではなく、貧困問題、人種・女性・障がい者他の差別問題、地球環境問題、全てを解決する糸口になる行動が、ビーガニズムだと、この本は訴えている。

実際に、地球上の99.9%（極寒地に生きるなどの事情をかんがみて0.1%を除く）の人々が、肉食をしなければならない理由はあるのだろうか。人か人以外かという線引きで、生きたままミンチにされたり、首を切られたり、虐待をされる現実に目をつぶることは許されるのか。種差別を当然視しなくては行けないのか。

貧困層の農場労働者の農薬被害、性暴力被害など、知ることによって商品を選ぶことができる。また、植物の命のことを考えるなら、今の畜産で消費される植物のことを考えるべきである。先進国の人間が肉食を止め、植物を食べれば、飢餓も植物の消費も減る。さらには、抗生剤を飼料に混ぜこまれて、最悪の環境でも病気にならないように飼育された動物の排せつ物からの耐性菌の増加を加速させたり、その肉を食べたりするよりも、そうしない方がよい。アニマルウェルフェアについても結局は問題を解決しない。

消費することに無自覚では人間社会は変わらない、と目を覚ますことができる本だ。 (野田)

『まんががアフリカ少年が日本で育った結果』

星野ルネ著

毎日新聞出版

(2018 年)



この本はカメルーンの女性と日本の男性の間に生まれた男の子(ルネ)がカメルーンと日本の様々な違い、家族のこと友達のことをまとめた本である。教えてくれたのは川越で中学校図書室の仕事をしている方。本が出てすぐのことだったが、図書館に予約すると確か 30 人待ち。トホホであったが、予約して1年半ほど、やっと届いたのだ！

手に取って思っていたのとちがう！ととまどった。片面から見開きで読みきりはよかったのだが、4 コマ漫画のように並んでいなくて、ごちゃごちゃ？年齢のせいかわりに読むのが難しく感じたが、読んでみると面白い！書いてある内容も文化の違い・差別問題・カメルーンと日本への作者ルネさんの思いが分かりやすく表現され楽しく読めた。ルネさん自身の明るい性格(アフリカの広々とした中で 4 歳まで育つ)アフリカから日本に来て住んだのが姫路で関西育ちのテンポよい関西の言葉と読み仮名もありすぐに読み終わった。彼の悩みは、家族の中で一番見た目が母親似でアフリカ人であること、でもそれもルネさんなりに楽しんでいるようだ。いま「多様性」と言われているが、見かけだけで判断するのではなく人間と人間として認め合うことを再確認させてもらった一冊である。

昨年コロナ禍で一時ひどかった差別、誹謗中傷などの問題は SNS から始まった。この原作は SNS で人気になり、きっと大勢の方が読んで本になったと思う。便利な道具は使い方によって悪くもなり、良くもなる！でもやはり本を読むことの大切さをこれからも持ち続けいろいろなことを考えていきたい。 (あや)

さいたま市女性学研究会(ゆい)主催「ブックトーク&井戸端会議」

第21回「コロナ禍を抜けたら社会は変わるか」

2021年9月12日(日)14:00~16:00 パートナーシップさいたま第三会議室

今号を編集している今は、2021年6月中旬で、さいたま市は6月20日までまん延防止等重点措置の対象区域となっている。マスクをし、三密を避けるべく不要不急の外出をせず、ワクチンの接種はいつできるのか気をもむ日々である。暑い夏が過ぎたら、社会はどう変化していたのか、話し合ってみませんか。



参考図書は、『Day to Day』(講談社編 2021年)。昨年4月から講談社のサイト tree では、日替わりで日本の作家が掌編の小説、エッセイを発表し、無料で読めるようにした。8月、100名で終了して、それを単行本にしたものである。短い文章ではあるが、コロナ禍と向き合う作家たちの思いを毎日読めるのが楽しみであった。



連載企画 Day to Day | 記事詳細 | tree (tree-novel.com)で今も読むことができる。

参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。

■パートナーシップさいたま耳寄り情報■

令和3年度性暴力防止セミナー(オンライン講座・全1回) デジタル性被害 今起きていることを知る

AV出演強要やリベンジポルノなどの性的な被害は、スマホの普及やインターネットの発達により、傍からわかりにくい形で、より簡単に子ども・若者の身近に存在するようになってきました。新型コロナ感染拡大でたびたび外出自粛を要請される今、どんなことが起きているのか、ポルノ被害の相談支援に取り組む「NPO法人ぱっぷす」の岡恵さんにお話しいただきます。また、家族・友人、児童生徒・来談者などが被害にあったと知ったとき、身近な人あるいは支援者として心得るべきことなどもお聞きします。



講師 岡恵さん(NPO法人ぱっぷす)

配信期間 令和3年7月28日(水)~8月6日(金) YouTubeで限定公開(申込者のみ)

申込方法

令和3年6月3日(木)午前9時~7月26日(月)

←こちらの専用フォームにて受付

「ゆい」2021年夏号 第3号 (2021年7月1日発行)

編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字 野田

<事務局>磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com



発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮3F 電話 048-642-8107

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/index.html>